

ある老人保健施設の「奇跡」

兵庫県姫路市の東南、瀬戸内海沿いの古い町の一角にある「しおさきヴィラ」。この超モダンで画期的な老人保健施設（以下、老健施設と略す）は一九九八年、隣の井野病院（百床）と併設する形でこの地に出現した。

その特徴の一つは、一流のセンスと腕をもつ建築家が遊び心いっぱい創造した「癒しの環境」にある。一度そこに身を置くと、訪問者の心まで自然に落ち着くようで不思議な感覚につつまれるのだ。

取材中に何度か、「長い居間」風に演出された四階フロアの廊下に布団を敷き、スヤスヤと気持ちよさそうな痴呆老人の寝顔をみた。全面床暖房のそこは「土」をイメージしてデザインされており、薄茶系のフローリングで、広さといい居心地のよさといい、つい寝転びたくなる気持ちがよくわかる。

もっと愉快で楽しいのは、「西の町五番地」、「東の町一番地」という病室の呼び方。老人たちが慣れ親しんだ地元の町の所番地に由来するもので、これなら痴呆老人だって迷わずに自分の部屋へ戻れるかもしれない。

今から十一カ月前、四階フロアの痴呆病棟（ここでは同病棟を「雪」と呼ぶ）に八十五歳の女性が入所した。大正二年生まれのIさんだ。一昨年六月まで夫と二人暮らしをしていたが夫が亡くなり、老人性の痴呆症状が現れた。一人暮らしができなくなり、有料のケアハウスに入所したものの、腰痛と座骨神経痛で歩行困難となった。だが、病院で治療を受けると腰痛が改善して一人で歩けるようになったので、しおさきヴィラへ入所した。

入所後のIさんは、「散歩」が大好きでいつも施設内を歩き回っていた。とくにお気に入りだったのは、正面玄関を一步入った一階ホールにおかれた二人掛け用ソファ。青っぽい布地に木枠の洒落たソファにもたれ、Iさんはいつも満足な顔をしていた。

ところがある時、下血が何日か続き、隣の井野病院へ検査入院した。ただ、八十五歳という高齢と「積極的な治療は望みません」という家族側からの申し入れもあり、下血が止まった段階で退院し、ふたたび老健施設に戻ることが決まる。しかし、約一カ月の入院生活でベッド上で過ごしたためか、Iさんは全く歩けなくなっていた。

「高齢のIさんは、足が弱って立つことも無理だ。当分は寝たきりで歩けないだろう」「そうですね。老健施設へ戻ったら、一から歩く練習をしないと……」

そのとき、主治医と看護婦が交わした会話である。

退院したIさんは、家族の押す車椅子姿でしおさきヴィラの正面玄関へ戻って来た。そして格子戸風の二重自動ドアを通り過ぎ、フローリングの正面ホールへと入ってゆく。

「お帰りなさい、Iさん」

そう笑顔で出迎えたのは、同施設の看護婦長だった。

「ただいま」とIさん。

その視線の先に、見覚えのある木枠のソファが二脚並んでいた。すると、寝たきりで歩けないはずの当人が、車椅子を降りてトコトコ歩きだし、五、六歩先のソファに「やれ、やれ、やっと帰れたわ」という顔つきで腰を下ろした。

「あれーえ」

「なんや？ 歩けるやないのオー」

あつけにとられた顔で、車椅子を押して来た家族と看護婦長が同時に奇声を発した。いったい、Iさんに何が起きたのか。

「あのときは、へ車椅子で帰って来た人がどうして歩けるの？と驚きました。おそらく家庭的な雰囲気のもの、古巣”に戻れて、ご本人がへここなら歩ける”とパツと頭を切り換えられたんでしようね。それ以外には歩けた理由が思いつきません」

いま現在も、おとなしく朗らかなIさんは四階フロアの「住人」。少し足取りはおぼつかないものの、時に一階ソファで昼寝を楽しみながら、広々として居心地のいいフロアを元気に毎日歩き回っている。

「癒しの環境」で老人の心が蘇る

ちなみに国が、「病弱な高齢者が一般病院から家庭に帰る中間施設」として老人保健施設構想を打ち出したのは十年ほど前。以来、全国的に建設ラッシュがわき起こり、九九年末の時点で、その数は全国で二千三百余り。全体の八割以上は病院との併設型施設といわれ、老人介護の世界ではこれから大きな役割を担う存在だ。

そんななか、西日本の小さな町に出現したしおさきヴィラ（建設費総額十三億円）はアメニティの充実ぶりや日本医大医療管理学教室の高柳和江助教授など、「癒しの環境づくり」の専門家からも高く評価されている。

たとえば、このエレベーターホールには立派な「お地蔵様」が鎮座する。お地蔵様を医療の現場に祀ってあるのはここぐらいのものだろう。その理由を、しおさきヴィラの開設者である井野節子事務局長が笑顔まじりで明快に答えてくれた。

「患者さんがいかに肉体的、精神的に苦しまれようと、私たち凡人にお手伝いできることはわずかなものです。では、（その心を元気づけるのに）何かに代役を頼めないか？ 思いついたのがお地蔵様です。昔からこの国のお年寄りはお地蔵堂に集まって、日向ぼっこしながらダべっていたじゃないですか」

医学という堅苦しくて難解な世界とは正反対の「やさしい感性」。ついでにいえば、看護婦十一名と数人の介護福祉士を除き、総勢約五十人のスタッフは医療的に素人集団に近い。だが、その「自分の親」を世話するような親身なやり方に加えて、快適な「癒しの空間」が老人の心をやさしく刺激する。そしてオープン一年余り（入所者数累計約二百五十人）にもかかわらず、他の施設ではちよつと聞けない「回復のドラマ」が一人、二人、三人、四人、五人……と相次いでいるのだ。

その一人が、しおさきヴィラの「伝説第一号」となった七十八歳の女性Kさん。前にいた病院では「治癒不能の老人性痴呆」と診断され、重度の寝たきり患者だった。

娘二人は嫁ぎ、夫とも死に別れて独り暮らしだったKさんは二年前、骨粗鬆症を原因とする圧迫骨折でA病院へ入院。その前から軽い痴呆症状はみられたが、入院生活で痴呆症状はどんどん悪化し、排尿困難によりバルーンカテーテル留置（尿道に管を入れる）という姿でここへ入所してきた当初は、ひどい状態になっていた。

長い入院生活で足が弱ったせいも、全く歩くことが出来ず、ベッド上を這い回る。ウンコやおシッコをさわると汚いという感覚を忘れ、おむつを外して「ウンコ遊び」する。なお始末の悪いことに、自分の思い通りにならないと大暴れして、手当たり次第にモノを投げつける。

このKさんに対し、介護担当者が最初に試みたのは排尿訓練だった。そして一週間後、オシッコが出るようになり、バルーンカテーテルを外すことができた。また用便に毎回付き合ったら、一人でもポータブルトイレをうまく使えるようになった。その瞬間に七十八歳の彼女の頭には記憶がよみがえったのかもしれない。トイレを使えば気持ちがいい、ウンコやおシッコをさわったら汚い……この日から「ウンコ遊び」はピタリと止まった。

それからの数カ月間、独特の「癒しの空間」がプラスに働いた。木の格子戸や白い障子で区切られた「病室」から一步外へ出ると広々としたフロアが延々と続き、ここでは同年配の男女が一緒にテレビを眺めていたり、「町内」を散歩するように歩いている。

へあ、お仲間がいる……

Kさんはぐんぐん回復しはじめた。車椅子を使えるようになり、トイレにも廊下の伝い歩きで一人で行くことができるようになった。入所から半年後、明るい顔になった大柄のKさんは歩いて家に戻れた。その噂が口コミで広がったのだろうか、この古い姫路の町に一つの評判が生まれた。

「あそこへ入ったら、寝たきりのボケが治る」